

令和元年度「山形学」フォーラムが終了しました！

今年度の「山形学」フォーラムは、遊学館が大規模改修工事のため文翔館議場ホールを会場に開催されました。「みやびとあそびの山形」と題して、基調講演の講師にアーティスト・絵本作家の荒井良二氏、シンポジウムのシンポジストに山形銀行頭取の長谷川吉茂氏、出羽桜美術館館長の加藤千明氏、角川文化振興財団クリエイティブディレクターの宮本武典氏をお迎えし、「山形学」企画委員の菊地和博氏がコーディネーターを務めました。

基調講演は当初荒井氏一人の予定のところ、急遽宮本氏とのトークセッションとなりましたが、気心の知れた者同士の軽妙なやり取りは、参加者に大好評でした。山形市出身の荒井氏は、新幹線が米沢に入り山形に近づくと、体がだんだん子どもになっていく感覚があると語ってくれました。30代で絵本を描き始め、描くときは自分の子どもの頃を思い出しながら描いているとのこと。「絵本は表現のふるさと。自分の中にいる、かつての自分（良二少年）のために描く。だから絵本そのものがふるさと」と話していました。50代で『山形ジャーニー』という山形の芸術祭に関わるようになり、アーティストとしても活動するようになったことに触れ、「本の1ページ目を扉というが、これからも色々な扉を開いていく楽しさを子どもたちに伝えていきたい」とお話しいただきました。

続くシンポジウムでは、長谷川氏が紅花染めのネクタイ姿で登壇。日本最大の紅花商人だった長谷川家の歴史や昨年冬に山形美術館で開催された「寄贈50周年長谷川コレクション展」について語っていただいた他、舟運により様々なみやびな文化が伝わっていることなどもご紹介いただきました。

加藤氏は「日本文化の原点は縄文の美であり、縄文の女神、画家の小松均、荒井良二氏も縄文！」と熱く語っていただきました。また、山形美術館の所蔵数は特筆に値し、山形は東北随一のみやびの集積地であったと、自然風土や芸術文化における山形の魅力を語っていただきました。

宮本氏からは、肘折温泉で13年続いているイベント『肘折の火』活動や『山形ビエンナーレ』、山形国際ドキュメンタリー映画祭等について、「生活・暮らしの中で磨かれて守られてきた芸術文化を再認識して、存分に山形を楽しみたい」と、現代の山形の芸術文化の魅力を語っていただきました。

菊地氏は、「みやびとあそび」の後ろに黒川能や河北町谷内のひなまつりなど「ひなび」がある。山形の独自の歴史文化と絡み合っただけでなく、今も生き続けており、他県にも誇るべきものである。芸術文化の力が令和の時代に平和をもたらすようにと願ってやまないと締めくくりました。

専門の異なる4氏の講演・講話によって、芸術文化に対する意識が高い県民性や東北山形の優れた芸術文化がいにしえより形を変え、現代に脈々と受け継がれているという大きなテーマをとらえることができたフォーラムとなりました。



日 時：6月30日（日）13：30～16：30

会 場：文翔館議場ホール

参加者：106名

基調講演「ぼくの山形楽（やまがたがく）」

講 師：荒井良二氏（アーティスト・絵本作家）

シンポジウム「みやびとあそびの山形」

シンポジスト：長谷川吉茂氏（山形銀行頭取）

加藤千明氏（出羽桜美術館館長）

宮本武典氏（角川文化振興財団クリエイティブディレクター）

コーディネーター：菊地和博氏（「山形学」企画委員長）